

---

# バカとテストと極道娘

MAGIC RAIN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと極道娘

### 【Nコード】

N2232R

### 【作者名】

MAGIC RAIN

### 【あらすじ】

仁義、任侠。その世界を中心に生きる極道の孫娘福田夏帆、明久、雄二を中心とした生活が幕開けしていく

## キャラ紹介

名前 福田夏帆ふくた かほ

性別 女

性格

表では明るく、周りに愛想を振りまく癒し系の少女。しかし裏では姉御肌の芯のしっかりした少女で学園と私生活を分けている表裏の激しい女の子、多少子供っぽい一面を見せるがそれが何故か彼女の人気だと言うことは秘密である。

概要

極道の一家福田組の娘で、他人とは少し変わった生活をしている（本人曰わく他より家族が多いだけ）、祖父の組の人間はみんな家族と思っており、組の人間からは過保護な程優しく扱われている。変わった環境ながらも周囲に溶け込み、立派に学園生活をエンジョイしている。優しく周りに気配りの出来る女の子、しかし私生活に關してはひた隠しにしており。過去バレた事により誰も関わらなくなった事が原因で、自分が極道の娘と言うことを何があっても隠そうとしている。

交友関係は翔子を筆頭に雄二、優子などがある。また翔子には家庭の事がばれているが唯一変わらず接してくれる友人の一人。

小学校卒業と同時に両親が事故でなくなり、日本にいる祖父に引き取られ海外から帰国してきた帰国子女

得意教科 英語 数学 物理

苦手教科 国語、古典

もともとの成績はAクラスレベルで頭もいいのだが、国語、古典は壊滅的。翔子や優子の指導のおかげで50点が取れるか取れないぐらいの成績になってはいるが、正理解が全く出来てはいない。日本語自体は問題なく扱えるが嬉しくなったりテンションが上がると英語混じりになる。

容姿は母譲りの異国特有の金髪で、瞳の色は黒。本人はこの不釣り合いな瞳と髪にコンプレックスを抱いており、普段はカラーコンタクトで瞳の色をごまかしている。

本人曰わく「金髪に黒の瞳なんて気持ち悪い」と嫌がっている。

髪型はツインテールだったりポニーテールだったりと気分に変更している。

趣味はこれといった物はなく、強いて言うならばのんびりと昼寝する事である

## 第一問

私の生活は他人から比べてはるかに一般人離れしている。朝の光景を見るだけでそれは直ぐにわかる。

「お嬢！……！お気をつけて……！！！」

そういつて門前に十数人の人間が毎朝学校に行く私を自宅の門前まで見送ってくれる。

いくら仁義と任侠を重んじる極道の家柄と言っても私にまでそんな態度とらなくていいのに……  
あくまでここはお祖父ちゃんの組であって私は関係ない訳だし。

「政さん、いつも見送りありがとね。」

私はいつも通りのセリフを言うと、政さん（本名高橋浩司）は何でもないといった様子で頷く。

「相変わらず凄い人数……」

そう言ったのは霧島翔子ちゃん、私の環境を知ってなお友人として接している数少ない友人の一人である。なんていうか大物だよね……

まあ今までの説明の通り私の組は極道の家柄である。父方の祖父が組長で祖父が言うにはこの組は任侠と仁義を重んじる極道らしい。任侠とかそんな難しい言葉は正直わからないけど、お祖父ちゃんの仲間の人達はみんな優しいし極道らしい怖さは全然感じない。

「翔子ちゃん、一緒に行こう。たまには坂本君じゃなくて私と二人で」

そういつて長らく門前で待たせた友人の手を引いて、新学期早々友人を遅刻させまいと私は翔子ちゃんの手を引いて駆けて行った。

(それにしても…お昼ご飯作ってないけど…みんな大丈夫かなあ？まあいざという時は出前か何か頼むでしょ。)

「翔子ちゃん…今日は振り分けのテスト結果発表の日だね。一緒にクラスになればいいんだけど……」

この我らが文月学園にはとあるシステムがある。それによってクラ

ス決めは振り分け試験というテストによって決められる。

「夏帆……残念」

「しょうがないよ、なっちゃったものは」

霧島翔子は学力については学年トップの成績なのだ。結果は既に最高クラスのAクラスに決まったような物だ、しかし夏帆のほうは試験当日欠席といった結果となり無得点の0点。最低クラス入りが確定している。

そんな話をしているうちに、気が付けば校門に到着する。そこでは教師である西村先生……みんなから鉄人と呼ばれ、非常に親しまれている？先生だ、ガツチリとした体格の非常に暑苦しい先生だ。

「福田、今失礼な事を言われた気がしたんだが……」

どうやら思った事が顔に出ていたらしい、西村先生は疑うような視線でこちらを見つめる。勘の鋭いせんせいだなあ。

「気のせいです、西村先生、こんにちは」

「……おはようございます。」

私は言い訳をしながら挨拶を……翔子ちゃんは丁寧に会釈をしながら挨拶をする。

「福田、そこは【おはようございます】だそれを使うのはお昼だけだぞ。」

海外暮らしが長く、日本語にあまり馴染みが無いので私は今のよう  
に日本語の用法を間違えたり、英語混じりになる事がある。なんて  
いうか日本語って難しい……

「あう、ごめんなさい」

ちなみに私の間違いをしっかりと指摘してくれるのはこの先生ぐら  
いだ。他の人は私の言葉遣いを指摘してくれる人はいない。

「霧島、良くやったな。文句なしのAクラス入りだ。」

鉄人の労いの言葉に翔子はぺこりとお辞儀をする。さすがは学年ト

ツプの成績保持者だ、難なくAクラス入りをしている。

翔子にクラスを知らせると、鉄人は今度は夏帆の方に目を向けてクラスの通知書を渡しながら答える。

「福田、残念だったな。しかし私は家族の為に休んだお前の行動は決して間違いではないと思う。再試験をしてはやりたいが、規則は規則だからな……………」

本当ならば運がよければ翔子と同じAクラス、調子が悪くともBクラス入りは確定の学力があったのだ。

しかし夏帆は試験当日欠席してしまった。理由は祖父の組の人間のほとんどが風邪で倒れ、夏帆は「みんなを放って試験なんか行けない」と、一人で20人近くの人間の看病をしていたのだ。

「西村先生、大丈夫です。私はどんな設備でも気にしませんから…  
…翔子ちゃん、半年後もその教室にいられるといいね」

嫌味や皮肉ではなく、純粹に友達として、よきライバルとして彼女

は自らの目標であり自分の憧れである翔子に宣戦布告をする。

「うん、待ってる……」

夏帆の気持ちを受け取ったのか……嫌な顔一つしないで翔子は微笑む。

「でも……その前に日本語の勉強をしつかり……」

「うっ……」

痛い所をつかれ私は目を逸らす、正直私は日本語が苦手だ。しゃべり自体は会話がギリギリ成立するが、読み書きに関しては正直意味が分からない……最近翔子ちゃんと友達の優子のおかげで少しだけ字がわかるレベルだ……それでも入学当初はひどかった物だそう考えれば大分進歩をしている。

「大丈夫だもん、No problemだもん、世界の標準語は英語だもん。日本語なんて解らなくても生きていけるもん」

そういつて私は逃げ出すように校舎に駆けていった……

「日本で暮らしてるのだから無いと困るだろう……」

西村先生が呆れた顔で何かを呟いていたが、特に気にも止めず自らの教室に向かっていった。

目指すはFクラスの教室、きっと個性的な面々に囲まれた楽しい学園生活が再び始まるのだろうと改めて新学期に胸を躍らせながらそのまま教室へと走っていった。

## 第一問（後書き）

新作作っちゃいました

気まぐれ猫更新しろとか言われそうですが、正直あちらはネタが出ないと書けない状態です………

出来たらこちらの方も応援お願いします。

## 第二問

「これは酷い」

夏帆は目の前の建物に対し苦笑いをする。そう、これから私がしばらく勉強に励む教室だ。しかし教室は酷い状態だ、椅子は無く座布しかも布団机ひしにいたっては卓袱台である。所々窓はひび割れており風が入っている。

「さっきの教室とはえらい違いだよ……………」

さっきの教室とはAクラスの教室の事である。あそこは机はシステムデスク、椅子はリクライニングチェア更にパソコンやお菓子などいたせりつくせりである。

(うう……………なんかもう帰りたくなってきたよお……………)

あまりの設備の差に夏帆は既に心が折れ掛けている。しかしいつまでもショックを受けている訳にもいかない。

「よし、覚悟を決める。私!!!!!!」

いつの間にか予鈴が鳴っている。教室の前に突っ立って居るうちにいつの間にか遅刻の時間になっていた。

「あれ？福田さんどうしたのこんなところで。」

聞き覚えのある声に顔を向けると、そこには知っている人物の顔が現れる。

（ああ、そっかあバカクラスなんだから……吉井君もいるんだ。ちよつとだけラッキーだな。）

内心そう思いつつも笑顔で慣れない日本語で挨拶をする。

「あつ、吉井君……えーっとコンバンハ？」

「福田さん、それは夕方あたりの挨拶だよ。それでどうしたのこんなところで……BクラスやAクラスの教室はあっちだよ。」

ちなみにこの子は吉井明久。この学校では馬鹿の名で通っている男の子だ

どうやら彼は私がAクラスかBクラスだと勘違いしているのだろう。

「私もFクラスなんだ。試験当日休んでしまいました……」

困った顔をして顔を伏せる夏帆、こつも不意打ちで話かけられて対応に困っているのだ。

無言の時間が一時流れる。それもその筈、日本語自体上手く扱えない人が慣れない人間に対し自分から話掛けようなどと思わないだろう。

明久はあまりの沈黙に耐えられず、その場を打開すべくやや強引な手だが夏帆の手を引つ張り告げた

「とにかく、ここにいてもしょうがないし。教室に行こ。」

突然手を掴まれた夏帆は驚き、「きゃっ」と小さく悲鳴をあげられながらもやや強引に教室へと連れられていった。

この時夏帆の顔が赤くなってる事に明久は知る由もない。

「皆さん、おはようございます。」

いつもの大人しい表情で明久と一緒にFクラスの教室入る二人  
本日3回目にしてようやくしっかりと挨拶を成功する夏帆。

(わあ、男の子ばかりだ……………)

周りのクラスメイトを見回して軽く気まずい顔をした。正直同性の友人がいない事は私にとっては辛い所がある、コミュニケーション能力が周りとは比べ著しく低いからである。

「お主もFクラスじゃったのか奇遇よのう」

爺言葉を使うこの人は木下秀吉。同じ演劇部の部活の仲間であり、私の友人である。他の人が美少女と間違える程可愛い顔をしてはい  
るが男の子である。

「秀吉君も相変わらずの結果だね。」

そう、彼は演劇という分野ならばかなりの実力なのだ。しかし肝心な勉強の方はからつきしである、まあ本人が勉強する気が無いって  
のが大きいのだが……

基本的に私は秀吉君以外の男子はまともに話の出来るのは翔子ちゃ

ん繋がりの坂本雄二君だけである。吉井明久君も向こうから話掛けよられれば問題ないけどこちらからはまだまだ出来ない。

秀吉君は見た目が女の子みたいだからあまり気兼ねなく話が出来ることが、まだまだ上手く伝えたい事を伝えきれない……言葉の壁って案外大きい……………

「坂本君もFクラス何だ。」

「まあな。」

夏帆の言葉に何でも無いと言った様子で答える雄二、しかしその瞳は何か思索しているようだ。

（ああいう坂本君って何か考えがある時って翔子ちゃんが言ったなあ）

「「うういの何て言うんだろう物思いに……腐る？」

「それを言うなら『物思いにふける』でしょ腐ってどうするのよ」

夏帆の的はずれな事に対し突っ込みを入れたのは唯一この教室で女子の生徒の島田美波。

彼女も帰国子女で、まだまだ日本語に慣れていない。そのせいか同じ帰国子女同士気が合うのか夏帆と美波は友人関係でもある。

「美波ちゃん、良かったらてつきり女子は私だけかと……………」

その言葉に相槌をうつて辺りを見回す美波、おそらく周りが男子だらけの現実を再認識しているのだろう。

(うう、やっぱり所々汚い所が目立つなあ。今度掃除しなきゃ)

改めて教室を見渡し再び教室の悲惨さを再認識すると夏帆は改めてそう誓うのであった。

## 第二問（後書き）

次回は代表演説の所まで……書けたらいいなあ

### 第三問（前書き）

結局代表演説までいかなかった……

次話こそは……

それと前書きとあとがきに何を書こう……ゲストでも呼んで対談みたいにしよっかな……皆さん意見お願いします。

### 第三問

「それでは皆さん前の席から自己紹介をお願いします。」

予鈴が鳴り担任の先生がやってくると、ありきたりなHRが終わり新学期恒例の自己紹介タイムが始まる。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してある。今年一年宜しく頼むぞい」

最初に名乗るのは美少女のような容姿をしておるが、男という不思議な人間だ。その容姿に教室中が柔らかな空気になる

「……………土屋康太……………」

次に答えるは小柄な体格の男子生徒、かなり無口で目立たない印象が伺える。

「島田美波です。海外育ちで日本語は喋れるけど、読み書きは苦手です。あ、でも英語は苦手です。ドイツ育ちなんで、趣味は……………」

次に答えるはスレンダーな容姿の少女、島田美波。黙って居ればかなりの美少女ではあるが……………」

「吉井明久を殴ることです。」

かなり良い笑顔でそう答える。そう、少々性格に難があるのだ……

明久は美波の自己紹介に身を縮こまる。

その後も名前や所属している部活や趣味を答えるFクラスの面々。そしてついに夏帆の番となる。

「えーっと私の番ですね」

座布団から立ち上がり、クラスで唯一の金髪をなびかせながら律儀にも教卓の前に向かいながら自己紹介をする。しかし……

「福田夏帆です。島田さんと同じく帰国子……」

(がっ 何もないところで躓く音)

(バキッ 教卓にぶつかる音)

(ガシャーン 教卓が粉々に粉碎する音)

何も無い所で見事に躓き、見事に教卓に頭が直撃する。

「換えを持ってきます、皆さんは自己紹介が終わり次第自習をしていて下さい。」

そういつて担任の福原先生は壊れた机を抱え教室から出て行った。

「うう、痛い……福田夏帆です。秀吉君と同じく演劇部に所属しています。帰国子女で日本語は苦手ですが宜しくお願いします……」

涙目になりながらもしっかりと自己紹介をする夏帆、その様子に何人かの生徒は顔を真っ赤にして悶えていた。

「うう……おでこ赤くなってるよお……次は吉井君の番だよ……」

自身の自己紹介を終えると、赤くなるおでこを抑えながら席につき明久に伝える。

「えーっと吉井明久です。気軽にダーリンってよんでくださいね」

「『『ダアアーリン!!!!!!』』」

男の野太い声にやられたのか青い顔をしている明久。余程気分を害したのである。

「失礼忘れて下さい。」

ガラッ!!!!

粗方自己紹介を終えると突然扉が開き、一人の少女が息を切らしながら入ってくる。

「あの……遅れて………すみません……」

「えっ瑞希ちゃん?なんで?」

あまりの人物に夏帆は驚いた顔をする。それもその筈、彼女の名前は姫路瑞希。体は弱いが、真面目で勤勉な生徒でかなりの優等生なのである。テストになれば間違いなく学年上位に名を連ねるほどの成績だ。

「姫路、ちょうどいい。今ちょうどクラスの自己紹介をしていたんだ。お前頼む。」

雄二がそのまま姫路に自己紹介を促し姫路もそれに従う。

「あ…あの…… 姫路瑞希と言います。皆さん宜しくお願いします。」

「はい!!--」

とある男子生徒が挙手をする。それに姫路と夏帆は振り向く。

「お二人共…… なんでここに居るのですか?」

「実は試験の日に熱が出てしまいました」

「私は家族の人達が風邪で落ち込んでしまつて…… その看病に……」

「夏帆よ落ち込んででは無く寝込むの間違いなのじゃ。」

二人の回答に周りが再びどよめく、そこで夏帆は雄二と明久にアイ

コンタクトを送ると教室を出て行った。

「それで俺と明久になんのようだ？」

「多分雄二君が今考えている事と同じ事だと思う。……試験召喚戦争………やってみない？」

雄二の問いかけに夏帆は真面目な顔で答える。

「二人を呼んだのは雄二君はクラス代表だから………吉井君を呼んだのは一番クラスで召喚獣の扱いに慣れているからだよ。それで………どう？」

「俺は最初からそのつもりだったからな。学力が全てじゃないと証明するためにな。」

「私は………瑞希ちゃんの為にこの最悪な環境をなんとかしたい！  
！！一年生の時瑞希ちゃんには日本語とか教えて貰ったり色々お世話になったし………それに私もこんな教室お断りだから。」

至極真面目……しかし笑いながら笑顔で言う夏帆。彼女にとってこの環境は友人として、学友として姫路瑞希と言う人間に恩返しが出る機会なのだ。

しかしこんな事を当の彼女が知れば、気を使わせてしまう。だからこそ雄二と明久の三人だけで密会をしているのだ。

「僕も賛成。本当なら福田さんや姫路さんはAクラスになるはずだったんだから」

「吉井君の大好きな瑞希ちゃんの為に頑張ろうね。」

その言葉に顔を赤くして否定をする明久……かくしてこれがFクラスの新学期早々に学年全体を揺るがすのであった。

一人は友人の為に、一人は証明の為に、そして一人は恩に報いる為に……

#### 第四問（前書き）

長らくお待たせしました。

待たせて分最高の出来　　とまではいきませんが、個人的に満足できる仕上がりになりました。

話が長いとあれなんで続きは後編で

## 第四問

「みんな、少しだけ私の為に時間をくれないかな？」

ざわざわと騒がしい教室に夏帆の凜とした声が響く。夏帆は周りが自分に視線が集まった事を確認すると、恥ずかしさで少し照れた顔をする。

(もお……………坂本君、なんでこんな事しないといけないのかな?)

「今から言うのは私と代表の二人の意見……………というかなんていうか……………」

雄二の指示で、夏帆は本来代表である雄二の仕事である試験召喚戦争の提案をするためにみんなの前に立っている。

しかし知識はあっても国語力が皆無なのだ。人前に立つのもあまりよしとしないせいかしどろもどろとしている。

「夏帆、考えるな。今自分の思った事を言えば良い。」

夏帆の挙動不審な様子に雄二が軽く助言をする。

その後小さい深呼吸をして、意を決して口を開いた。

「私達Fクラスは、クラス設備の不満を払う為に上位クラスに試験召喚戦争を仕分けたいと思います。」

「福田さん、仕分けるんじゃないやなくて仕掛けるんだよ。」

相変わらずの間違いを明久に指摘される。しかし真面目な表情でそのまま言葉を続ける。

「私はこのクラスにはこんな設備は似合わないと思います。確かにこのクラスの多くはかなり勉強が出来ない人がいます。しかし人間の価値は頭の良さが全てではないと私は思う、例えるならエンジンは昔私達Fクラスの人間と同じく所謂馬鹿と呼ばれる部類の人間と呼ばれていました。しかし彼は発明という分野に置いて彼は発明の父と言われています。」

静かに、そしてゆったりと透き通る声で夏帆は自分の考えを伝える。Fクラスの面々も彼女の真面目でひたむきな態度に黙って聞いていた。

「つまり私が何を言いたいのかと言うと、学力が全ての評価の基準

にすべきではないと言うこと。このFクラスには学力に勝る才能に恵まれた人間がいっぱいいます。そんな皆さんに私から個人的なお願いです。今私が提案した試験召喚戦争、私はとある人の為にこの教室をなんとかしたい、お願いします……………自分勝手なのはわかっていますけれど……………どうか私に力を貸して下さい。」

深々と頭を下げてクラスメイトに呼びかける。  
その後今度は雄二か前に立って話を始める。

「お前ら、俺がFクラス代表の坂本雄二だ呼び方については何だっ  
て構わない好きに呼んでくれ。」

雄二はまずは自分の自己紹介を始める。  
それが終わると今度は隣に夏帆居る夏帆を示し口を開く。

「みんな、先程の話を聞いただろう。各々どう思ったかはわからない、しかし俺達は同じクラスメイトのあそこまで必死な気持ちを無  
碍にしているのか。」

雄二の言葉に周りが同調していく。

「それに俺達はAクラスにすら勝てる力がある。おい、康太いつまでも姫路のスカート覗いてないで前に出てこい」

「……………（ブンブン）」

「土屋君あんなに決定的な証拠残してまだ否定してるよ……………」

雄二の指摘で明らかかな証拠を残して居るにも関わらず、未だに否定を続ける康太。流石に女の子である夏帆は引いていた。

「紹介しよう彼がかの有名なムッツリーニだ」

「ムッツリーニ……………本名土屋康太。学園の至る所にカメラを設置したりとえっと、えろ？の為なら命を懸けるって言われてる。」

夏帆は相変わらずの知り合いの紹介を呆れながら語る、ちなみに余談であるが女子には軽蔑の念で男子からは畏敬の念で恐れられている。

夏帆の説明に周りがどんどんざわついていく。

「彼女ら二人については説明する必要はないだろう。彼女らはAクラスにすら対等に戦えるだろう。」

「が、頑張ります。」

「私は文系科目以外なら………理系なら点数だけならトップですし。」

夏帆は自信満々と言った様子で答える。それもそうだろう、日本へ移住前海外では小学生ながらに中学レベルの学習を受けていた天才少女なのだから………

まあ現在は必死に上達しない日本語を勉強の為他教科は勉強をしてはいないが、元々のアドバンテージが異常なのだ。いくら相手がAクラスでも負ける筈がない。

夏帆は自信満々と言った様子で答える。

「それに木下優子の弟木下秀吉もいる」

「木下秀吉、私達演劇部のホープとして有名だよ」

夏帆の説明が終わると、私は再び教卓だったがラクタの上に立ち向かい、今度は先ほどのおどおどした雰囲気を見せずに凜とした態度で教卓だったがラクタで深呼吸をして叫ぶ。

「まずは手始めに今頃私達を馬鹿にしているDクラスに焼きを入れてやるじよ」

ばんつと教卓だったガラクタを更にボロボロにしながら言うと急にクラスがしんとする。

「焼き？」

一人のクラスメイトの言葉に気づき内心かなり焦る夏帆、しかし雄二がすかさずフォローを入れる。

「夏帆、日本語覚えるのはいいが。極道物の映画で覚えると間違っ  
て覚えるぞ。」

「あ、うん。そうだねわかったよ次からは字幕スーパーで見るね」

焦り過ぎて軽く言ってる意味がわからなかったが、なんとか話を反らす事が出来た。

「ゴホン、と、とにかく吉井君。戦争の死者をお願いします。」

「いや、じゃからそこは死者ではなく使者なのじゃ」

まあある意味夏帆の言葉は間違っ  
てはいないのだが  
夏帆の頼みを断ることが出来ず  
明久は教室を出ていった。

流石に

同時に夏帆の携帯が鳴り響く。携帯のメールを確認すると同時に頭を抑えてため息をついた。

「どうした、夏帆」

『一大事、至急帰宅お願いします。BY高橋』

「はあ、おじいちゃんがまたなんかやった見たい　家の用事  
早退するから先生に伝言宜しく。」

雄二の質問にため息混じりにいうと、そのまま鞆を肩に掛けて帰宅していった。

「雄二よ、夏帆無しで大丈夫か？」

「秀吉、大丈夫だ。夏帆はまだ使うつもりはないからな。むしろ居ないほうが情報が広まり難い好都合だ」

余談だがその後ポコポコにされた明久が教室に戻ってきた

帰宅すると、門前で政さんが私の帰りを待っていた、既に彼の手には余るのだろう

「お嬢、申し訳ありません。」

政さんが頭を土下座するような勢いで下げる。そこまでやらなくてもいいのに

苦笑いを浮かべて政さんに確認するように尋ねる。

「この様子は、またいつものパターン？」

黙って政さんは頷くと夏帆は呆れた顔をした。

「もうついこないだ説法したばかりなのに全く懲りてないよ」

「説法ではなく説教です」

政さんが付け加えるように言うと夏帆は黙って家の門をくぐって行った。その背後には鬼のようイメージが見える程明確に怒気がかいま見えた、政さんは巻き込まれる事を恐れてそのまま庭掃除に精を出すのであった。

「みんな、ナニヲシテイルノカナ？」

家のほうで何やら恐ろしい気配を感じるが政さんは気にしない事にした。

「みんな、ナニヲシテイルノカナ？」

居間の扉を開き、笑顔のまま夏帆は居間でどんちゃん騒ぎをしていた連中に声を掛ける。

笑ってはいるが目が全く笑っていない、拳句背後には鬼が見える。

「おお、夏帆か。学校はどうしたんだ？」

先ほどまで騒ぎの中心にいた祖父は、話を逸らそうとする。

「うん、早退してきたよ。誰かさんが馬鹿やっているせいだね。」

夏帆の質問が終わると、明らかに聞く質問を失敗したことに気付いたが既に後の祭りであった。すると祖父は信じられない行動に出た。

「ああ、騒ぎましたよ。宴会開きましたよ!!!息子(舎弟)の全快祝いじゃなにが悪い!!!」

「良いわけ

あるかー！ー！！！」

夏帆の叫びと同時に夏帆の回し蹴りが祖父に炸裂し、大広間の壁まで転がっていく。そして烈火の如く怒りだす。通常ならば少女の蹴り程度でここまで威力がでるはずもないが、夏帆は腐っても極道娘である。護身術の為に祖父や政さんからある程度喧嘩のやり方は教わっている。普段は決して見れないがこのように祖父を叱る時に見せる事がある。

「正座！！！！！」

「！！！！はい！！！！！！！！」

祖父を筆頭に20人近くの人間が一斉に一人の少女に正座するといふシユールな光景が一瞬で出来上がった。

「おじいちゃん、私との三つの約束 覚えてます？」

「ふん。な、なんのことやらわからんわ」

意地を張って未だ反抗する祖父、まるで子供である。

「一つ、近所迷惑になるからあまり騒ぎ過ぎない。二つ、お金を無駄遣いしない事。三つ、朝からお酒は飲まない事。あれ？この三つの約束全部破ってない？みんな　　どういう事なのかな  
それに家のお金は全部私が管理しているんだけど、この宴会沙汰のお金はどこからでたのかな？」

「そ、それはお嬢の部屋のへそくりを親分が勝手に　　」

「おい、馬鹿お前ちくるなよ」

最早小学生以下のやり取りである。

「へー、私の貯金　　勝手に使ったんだそれじゃあ。あれ実は来週の土日の家族旅行のお金だから、キャンセルね　　」

「夏帆、それはいくら何でも　　」

「ん？なんか文句あるのおじいちゃん。」

とても清々しい笑顔で死刑宣告をすると、祖父を含めた人間が抗議の声をあげる。しかし夏帆の一言でとたんにそれは消え去った。

実際にあのへそくりはお気に入りの服などを買う夏帆のお小遣いなのだが、嘘も方便なのである。

「全く、私の学園生活

平穩に過ごせるのかなあ

」

初日からこんな調子ではと少女はため息をついた。

## 第四問（後書き）

極道娘、制作秘話）

夏帆「制作琵琶？」

制作秘話です、つまりなんで更新が遅れたのか言い訳する時間です。

夏帆「さ、最悪です。」

それじゃあ今回何故遅れたのかというと、夏帆を戦闘に出したくなかったからです。

主人公の最初の見せ場じゃねーかと思う所があると思いますがそういう理由です。

しかしただの温存では面白くない、それじゃあ原作トレース作業じゃないですか　個人的にそれは絶対に避けたかったんです

当初アイデアが3つありました。

一つ目 夏帆が汚く最悪の環境　　そして看病の疲れから体調を崩したから

二つ目

雄二の進言に従い大人しくしていた

三つの目

夏帆が何らかの形で早退

大体はこんな調子でした、そして3なら原作とは違った展開にはならないので

夏帆「んー、まあ許してあげよう。更新をサボっていた訳では無いみたいだし」

面目無い

次回の更新はなるべく早く頑張って見ます

そして最後にまあさんのほうでコラボのお話があったんで此方も近々投稿するんで宜しくお願いします。

**第五問（前書き）**

間違えて気まぐれ猫のほうに投稿してました

申し訳ないです

## 第五問

「なんで　　なんでヤクザの孫娘だからってこんな目に合わないといけないの？私は何も悪い事はしてないのに　　」

夕日の中、とある公園のベンチで泣きじゃくりながらそう言う夏帆を抱き締めながら翔子は言った

「夏帆、泣かないで。私は何があっても夏帆の友達だから　　」

「本当？」

ゆったりと翔子に身を預け、翔子にすがり付くように尋ねた。

そして無言で夏帆の手をとると、強引に小指同士で指切りをする。そうするとやっと夏帆の顔に笑顔が戻ってきていた

「うん、完璧。今日は良い出来だね」

エプロン姿で自身の料理を味見する夏帆、洋食は得意なのだが和食はあまり得意ではない。しかし祖父が朝はご飯に味噌汁と言ってい

るため和食となっている。  
夏帆も和食事態嫌いな訳ではなく朝食はいつも和食である。

「それにしても 今日はやけに静かだなあ

普段ならそろそろ組の人たちが調理場にやって来て手伝ってもらったりと騒がしくなる時間だ。基本的に家事のほとんどは夏帆の役目である、しかし人数が人数なので政さんに手伝ってもらっているわけである。

不審に思い調理場に設置されている時計で時間を確認すると、とある事に気がついた。

「あ 時計、止まっている」

そう思い自分の携帯で時間を確認するといつもより一時間早い事に気がついた。  
するとどうせならと閃き業務用の冷蔵庫を開けて適当に食材を取り出す。

「んー、時間はあるし。もう一品増やしちゃうか」

普段の朝食、ご飯と味噌汁と焼き鮭のメニューに一品追加しようと考えた夏帆であった。

てきばきと鼻唄混じりに食材を調理していく夏帆であった。

「夏帆、今日はなんだかご機嫌」

朝食を終えていつもの時間になりいつも通り友人が迎えにやってくる、毎度行われる盛大な見送りに照れながら家の門を出て私は学園へと向かっていた。

「えっ、そう？」

翔子ちゃんに言われていつの間にか舞い上がっており頬が緩んでいる事に気付いた。

「今朝ねちよつと早起きしすぎたから朝ごはんを気合い入れて作ったんだけど。皆が大絶叫してくれたからそのせいかな？」

「夏帆、大絶叫じゃない」

「正しくは大絶賛」

「ううっ

翔子ちゃんのbluey」

いつも通りの間違えに私は顔を赤くしながら英語混じりに悪態をつく。

どうも母国語である英語から離れられないせいかちょいちょいこのような使い方をしてしまう事がある。

翔子ちゃんには通じるが、他人や英語に親しみのない友人は首をかき上げてしまうのでこの悪い癖を治したいとは思いがどうもうまくいかないのである

翔子ちゃんのツッコミに少しだけいじけてツイントールの片方の髪を指に絡ませる。

「かわいい

」

そんな仕草がツボだったのか翔子は夏帆の頭を撫でる。

「ちょっと翔子ちゃん！？恥ずかしいって」

顔を真っ赤にしながら私が叫ぶが、翔子ちゃんはやめようとはしないでいつの間にか手まで繋がれ、校門をくぐるまで私はそのままであつた。

「よしFクラスclean up作戦開始」  
教室につくとまだ多少早い時間ためか夏帆一人である。そこであらかじめ持ってきた三角巾とエプロンを制服の上から着こなし、教室の掃除にかかる

「んーまずは窓をあける必要はないか風通しはいいしそれじゃあまずは畳の掃除からかな？」

換気の為に窓をあけようとするが不要ない事に気づき

時間も少ない事から一番慣れた畳の掃除から始める。慣れた手つきで畳を返すと一つずつ丁寧に埃を追い出していく。

「政さんみたいに畳を返せれば楽なんだけど」

畳を叩いた拍子に畳を見事に返す技である。昔政さんがやっていてビックリした物だ、なんでも昔はあやって畳を盾にして曲者から身を守ったらしい。近頃は銃が回って畳一枚じゃ身を守れないと物騒なことを言っていた事を思い出し思わず一人で笑ってしまう。

そんな事を思い出しているとふとこんな事を思った。

「よし、私もやってみよう」

何を考えたのか政さんの動きを思い出し私はいざ挑戦してみることにした。

「秘技畳返し なんちゃって。ってあれ？」

畳を叩くと何が良かったのか目の前の畳が跳ねる、しかし勢いよく跳ねただけでそのまま畳は元通りになり、勢いよく埃だけが飛び回る。

「げほっげほっ。うー、埃被った。こんな姿誰かに」

自分の恥態を誰かに見られてないか確認をとろうとして扉を見回すとちょうど一人の人物と眼があう。

「えっと 福田さんおはよう。」

あまりの気まずさからばつの悪そうな挨拶をしながら明久が夏帆を見ていたのであった。

自分のやった事を見られた事に気づき徐々に顔を赤くしていく夏帆  
そして恐る恐る尋ねる。

「吉井君 いつからいたの？」

「えっーと、秘技の辺りからかな」

見事に全て見られていたことに気付くとこれ以上はないほどにあわてふためく

「ちっ違うんだよ。えっーと違わなくてたまたま掃除してたらって、じゃなくいや違わなくて　　あー、いつもはこうじゃないんだよ。そ、そう今日はたまたまこういう気分だったの」

最早何をいつているのか解らないほど混乱している夏帆、どうしてこういう時つて変に言葉が繋がるのだろうか。しどろもどろになりながら言い訳を言う。

「なんていうか福田さんの、可愛い一面が見れて良かったよ」

「☎\$¥£%#&\*@」

突然可愛いと言われて言葉にならない声をあげてしまう。もう何が何だか分からなくなっていた

やめて、見ないで

こんなの私のキャラじゃないのに

夏帆の悲痛な心の叫びであった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2232r/>

---

バカとテストと極道娘

2011年10月28日16時01分発行